

教育史研究の「新たな船出」を妨げる言葉

VAN STEENPAAL Niels (京都大学)

「教育史研究はどこに向かうべきか」というテーマに対して、各報告者が有用な方向性を提起した。具体的には、「一国史」と「学校史」として展開されてきた従来の教育史の枠組みから脱する必要があるという共通の問題認識のもと、それぞれの報告者が、リテラシー研究や、デジタル・ヒューマニティーズ、学際化、国際化、複合化等、様々な対策を挙げた。この対策一個一個が、非常に重要で、一刻も早く着手することが望まれる。むしろ、本格的に着手されていないことが不思議なくらいである。というのも、「一国史」と「学校史」という枠組みから脱するべきであるという問題意識も、それに対するこれらの対策も、今日のような綺麗に整理された形ではなくても、以前からある程度には俎上に上がっていた。こうした実態は、以下二つのことを物語っていると言える。

- ①今後の方向性について、すでにある程度の共通認識が存在し、それを模索する段階はもしかして、既に終わりかけていること。
- ②それにもかかわらず、実行に移る段階になかなか至っていないという事実は、その実行を妨げている「何か」が想定されること。

では、邪魔している、その「何か」はどういうことかといえば、これはいろいろ考えられるが、今日の討論において着目したいのは、「ことば」という要素の役割である。三報告で私が引っかかった言葉をそれぞれ一つずつ取り上げて、それが孕む問題を指摘することで、私のコメントに代えさせていただきたい。

ルビンジャー氏報告に対して―「リテラシー」

最初はルビンジャー氏が取り上げた「リテラシー」についてコメントしたい。確かに、ルビンジャー氏が指摘したように、「リテラシー」観念の強みとして、「学校が義務化される以前、学校に通えなかった」、いわば「下級層の人々」の記録も研究対象にできることがある。しかし、「リテラシー」という「ことば」として、次のような、三つの弱みも指摘することができる。

第一に、「リテラシー」観念は「文字」を前提としていることである。「literacy」の語源はラテン語の「litera」、すなわち「文字」か「文章」にあり、その根本的意味は「文字」を知ること、もしくは「文字」を知るものである。たしかに、「教養」としての意味合いもあるが、その由来も「書物を多く読んだことによって蓄えた教養」というように、「文字」を前提としている。

しかし、人間の「教養」が「文字」を通じて得た知識に限るとは到底思えない。耳から入った情報、体を通じて覚えたスキルや、画像や表を通じてひらめいたこと、さまざまな要素が「教養」を構成していると考えられる。それは過去もそうであったし、現代のメディア社会においてはなおさら、文字と比べ、画像や動画に接する機会がより大きくなってきている風潮から考えると、もはや「文字」を優先する「リテラシー」観念は適していないとも考えられる。

第二に、「文字」を優先する「リテラシー」観念は、結局「学校」の役割を相対化するよりも、その重大性の再確認で終わってしまうことである。「リテラシー」観念は確かに学校に通えなかった「下級層の人々」を視野に入れることができるメリットはあるが、その視点が「文字」を前提

としている限り、それが多くの場合、その「下級層の人々」の能力を結局低く見積もる評価をおのずから導いてしまうこととなる。その低評価は、もとの思惑とは裏腹に、また「学校」の高評価に結ばれてしまうのではないだろうか。

第三に、「リテラシー」は能力自体を表す観念として、その能力を習得するプロセスや、それを発揮する行為を問わないことである。極端的に言えば、その観念を追及した果てには、読み書き能力を表す数字しかなく、実践が見えてこない。この数字を知ることは様々な意味において重要であるが、「教育」という枠組みの中で考えた時に、それよりも気になるのは、その数字の背景にある学びのプロセスである。

以上を踏まえて、ルビンジャー氏には次の質問をしたい。この三点を討論者と同じく「リテラシー」観念の「弱み」として考えていらっしゃるのでしょうか。もし、そうならば、それをいかに乗り越えるべきだとお考えでしょうか。

韓氏報告に対して―「大航海時代」

続いて俎上に挙げるのは、韓氏が報告の冒頭に、教育史学が直面している課題を「大航海時代」に例えたことの妥当性についてコメントしたい。その比喩は、もちろん、今回シンポジウムのタイトルに出ている「新たな船出」に合わせてくださったものなので、そういう意味において、親切的なレトリックである。しかし、韓氏が、報告内で詳細に描写している、実態としての教育史学の課題は、あまりにもこの比喩と相いれないものなので、敢えて取り上げてみたい。

まず、ヨーロッパの「大航海時代」の歴史的背景について、ご存じのように、そのきっかけとなったのは、従来アジアの商品とスパイスが流れてきたシルクロードが、オスマン帝国の拡大によって塞がれたことにあった。ヨーロッパの欲しいモノが入手困難な状況となったため、その欲しいモノを手に入れるため、新な道の模索、いわば「新たな船出」が必要になったのである。

しかし、その当時と比較して、現在日本の教育史学の状況は次の二点において大きく異なっている。

第一に、当時ヨーロッパの出航の目的（スパイス）と目的地（アジア）は、はっきりしていたため、新たな路線を模索することが可能であった。しかし、韓氏が指摘するように、教育史学の「目的やあり方を考え直す必要がある」とするならば、我らが直面している課題は、新たな路線の模索よりも先に、新たな目的地を設定することが急務である。

第二に、当時ヨーロッパは、欲しいものと切り離されたことを悩んだが、現在の教育史学における問題は、次々と、絶えずに寄せてくる新なモノや現象にどう対応するか、ということにあると思う。韓氏が報告に触れたスマホや、プロシューマーなどはそういった新たなモノと現象の事例となる。

以上から考えると、韓氏は、教育史学の現状を「大航海時代」のヨーロッパに例えたが、描写している実態は、その正反対ともいえる。ヨーロッパの「大航海時代」より、幕末期の日本のほうが、その実態をよく捉える比喩であるとも思われる。そして、その比喩に従っていえば、そこに現れる問題提起は新たな「船出」ではなく、むしろ「開港」なのではないだろうか。

以上を踏まえて、韓氏に次のことを問いかけてみたいと思う。「船出」か「開港」のどちらが、現在の教育史学の課題をもっともよく表す比喩だとお考えでしょうか。また、この二つの課題は、相互排他的なものか、それとも補助的なものとなりうるのでしょうか。

辻本会員報告に対して―「国際」

最後に、辻本会員がその発表の後半に提起した「国際日本学」という言葉である。もちろん、この言葉の背景にある理想、つまり、日本人による、日本人のための、一枚岩的な日本研究を打破する必要があるという意味合いには、何の異論もない。一つの研究対象を極めるには、一つのアプローチより、複数の視点から見た方が望ましい。しかし、このような理想像を、「国際日本学」という言葉で表すことは、その理想に反する逆効果があると私は考える。

実は、近年「国際日本学」ということが一つのキーワードになっており、多くの大学にも「国際日本学」もしくは「国際日本研究」と名付けるコースが設置されてきている。一見、日本学の「国際化」として、喜ばしい現象としても見受けられるが、私はこの風潮をむしろ悲願的に見届けている。なぜかといえば、「国際日本学」という言葉は、いわば「内」と「外」の視点を設置することで、その間の生産的な交流を塞いでいるからである。つまり、「内」なる日本研究と、「外」なる日本研究に異なる課題・方法・存在意義を認めると、それらが別次元、もしくは同時並行に走る二系統に分かれることとなる。しかし、「外」の視点というものは、単に「内」を考え直すための刺激ではなく、「内」に不可欠、不可避、そして不可分のものであると考える。

さらに言えば、「国際」という言葉の厄介な点は、このように「内」と「外」の枠組みを設置しているだけではなく、その「内」と「外」を、そのまま「国内」と「国外」という観念に当てはめていることである。しかし、「国内」に「外」の視点を持つ研究者、もしくは「国外」に「内」なる視点を持つ研究者も大勢いる。「国際」という言葉は、そうした多様性を隠蔽してしまう危険性を孕んでいるのである。

実際、これは潜在的な危険性を語ったものではなく、その危険性がすでに十分現実となっている。たとえば、近年、某大学に設置された「国際日本学」コースのウェブサイトには、その達成目標として、次のようなことが挙げられている。「学生の教養日本力を高め、世界で日本を代表できる日本人を養成します」。あるいは、「グローバル化に伴い、(中略)「語学力」だけでなく、日本人としての「品位」や「教養」が試される(中略)授業では、幅広い領域においてグローバルに活躍する日本人がもつべき倫理や行動規範について考える」。

つまり、「国際日本学」という一見コスモポリタンに響く言葉は、このように、代表的な日本人を養成することを目的とする、きわめて「一国」的なものとして展開しているのである。もちろん、すべての使用はそのような意味合ではないにしても、そのような危険性ははらむ言葉として、もう使わない方がいいとさえ私は考えている。

以上を踏まえて、辻本会員にはこの質問をさせていただきたい。討論者が「国際」という言葉に感じる以上の危険性を、どうお考えでしょうか。今後、教育史学会として「国際」化を追及しながらも、「国際」の言葉が孕む「一国」性をどうやって避けることができるのでしょうか。